



# 飼料

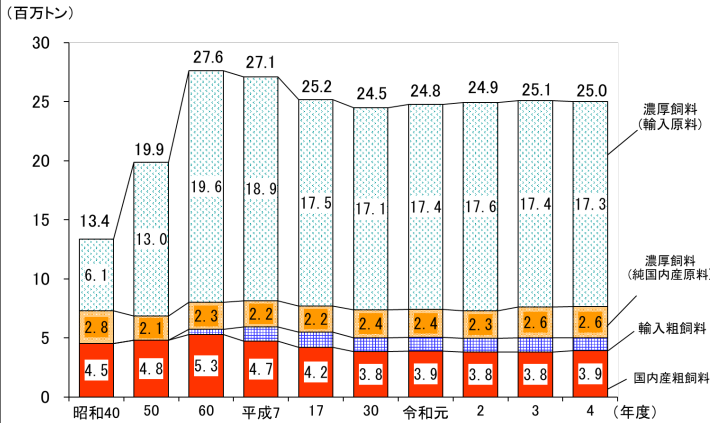
## ◆飼料需要量の推移

4年度の飼料自給率は、前年度と変わらず26%

飼料の需要量は、近年は2500万トン（TDNベース）程度で推移している（図1）。

令和4年度（概算）は、2500万3000トン（前年度比0.3%減）となった。

図1 飼料需要量（TDNベース）の推移



資料：農林水産省「食料需給表」

注1：TDN（可消化養分総量）とは、家畜が消化できる養分のエネルギー含量を示す単位であり、飼料の実量とは異なる。

注2：濃厚飼料「純国内産原料」とは、国内産に由来する濃厚飼料（国内産飼料用小麦・大麦など）である。濃厚飼料「輸入原料」には、輸入食料原料から発生した副産物（輸入大豆から搾油した後発する大豆油かすなど）も含む。

注3：昭和59年度までの輸入は、すべて濃厚飼料とみなしている。

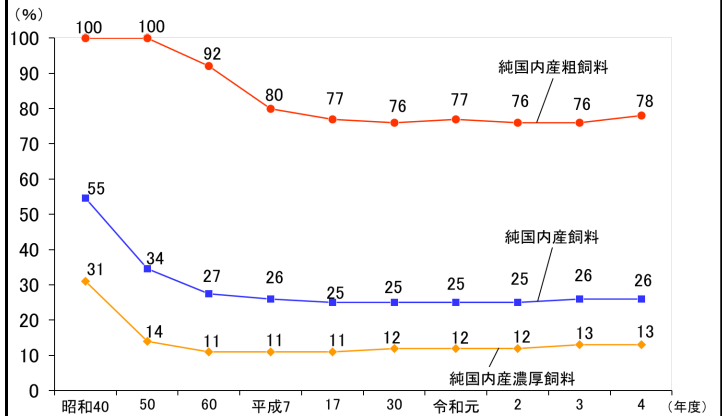
注4：令和4年度は概算値。

飼料の自給率を見ると、4年度（概算）の純国内産飼料自給率〔（純国内産粗飼料供給量＋純国内産濃厚飼料供給量）／総需要量〕は、前年度と変わらず26%となった（図2）。

また、純国内産粗飼料自給率は、牧草の生育が順調であったことに加え、乾牧草の輸入量が減少したことなどから前年度比2ポイント増の78%となった。

純国内産濃厚飼料自給率は、前年度同の13%となった。

図2 飼料自給率の推移



資料：農林水産省「食料需給表」

注1：昭和59年度までの輸入は、すべて濃厚飼料とみなしている。

注2：令和4年度は概算値。

## ◆飼料作物の生産

収穫量は、前年比5.9%増

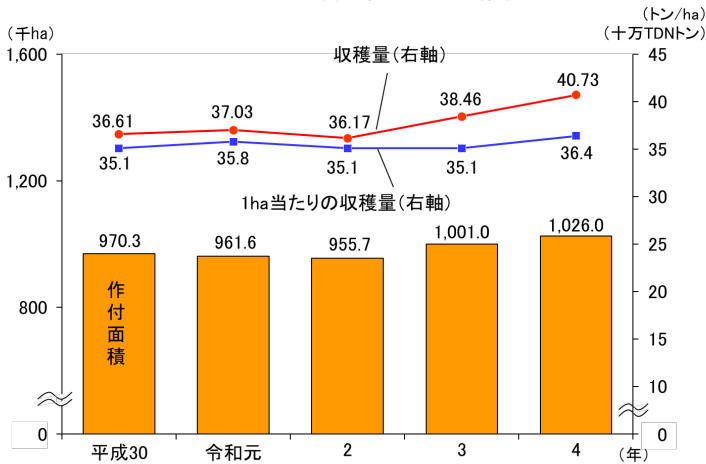
飼料作物の作付面積は、長らく畜産農家戸数や飼養頭数の減少に加え、農家の高齢化による労働力不足などに伴い微減傾向で推移していた。しかし、平成22年以降は、稲発酵粗飼料（ホールクロップサイレージ、WCS）および飼料用米の作付けが拡大した結果、28年まで増加傾向で推移した。

令和4年（概算）は、飼料用米の作付面積の増加な

どにより、102万6000ヘクタール（前年比2.5%増）となった（図3）。

また、飼料作物の収穫量（TDNベース）は、稲WCSや飼料用米の作付け拡大により、近年は増加傾向で推移している。4年は、407万3000トン（同5.9%増）と、前年を上回った。

図3 飼料作物の生産の推移

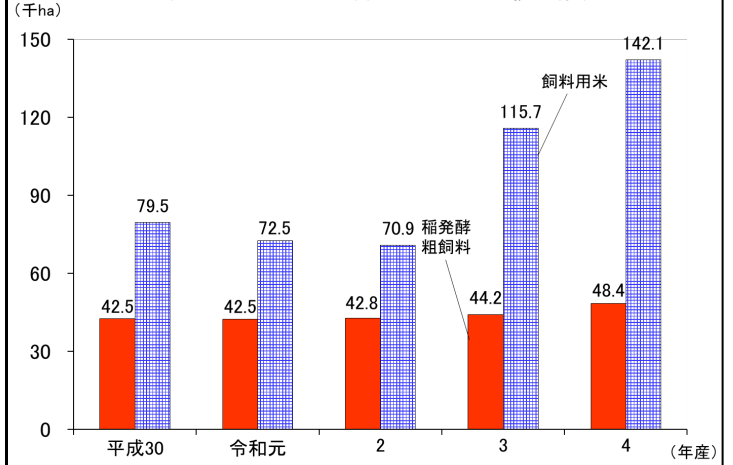


資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」、「飼料をめぐる情勢」

稲WCSの作付面積は、近年増加傾向で推移しており、4年度は、前年度から4156ヘクタール増加し、4万8404ヘクタール（同9.4%増）となった（図4）。

また、飼料用米の作付面積も増加傾向で推移しており、4年度は、前年度から2万6311ヘクタール増加し、14万2055ヘクタール（同2.7%増）となった。

図4 稲WCSおよび飼料用米の作付面積の推移



資料：農林水産省「飼料をめぐる情勢」

## ◆粗飼料の輸入

### 4年度の輸入量、乾牧草、ハイキューブともに減少

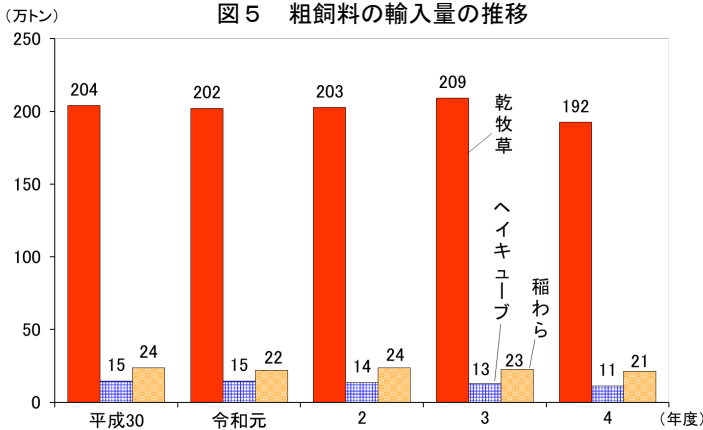
乾牧草の輸入量は、平成30年度は北海道における長雨の影響などにより乾牧草の供給が不足したことから、203万9406トン（前年度比5.2%増）となった（図5）。令和元年度も前年の北海道の天候不良の影響に加え、東北における天候不良などの影響を受け国内供給が不足したことから、202万1026トン（同0.9%減）となった。

3年度は、前年度から続く国際的な海上コンテナ輸送の混乱などにより不安定な供給状況が生じたものの、209万1383トン（同3.2%増）となった。4年度は、自給粗飼料の収穫量増加により、192万4653トン（同8.0%減）と、5年ぶりに200万トンを下回った。

また、ハイキューブの輸入量は、近年減少傾向で推移しており、4年度は11万2352トン（同13.7%減）となった。

乾牧草およびハイキューブの輸入価格（CIF）は、近年、主産地における国内需要や新興国などの需要が堅調である中、天候や為替により変動している。4年度は、為替が円安に推移した影響などにより、乾牧草、ハイキューブともに前年度を大幅に上回った（図6）。

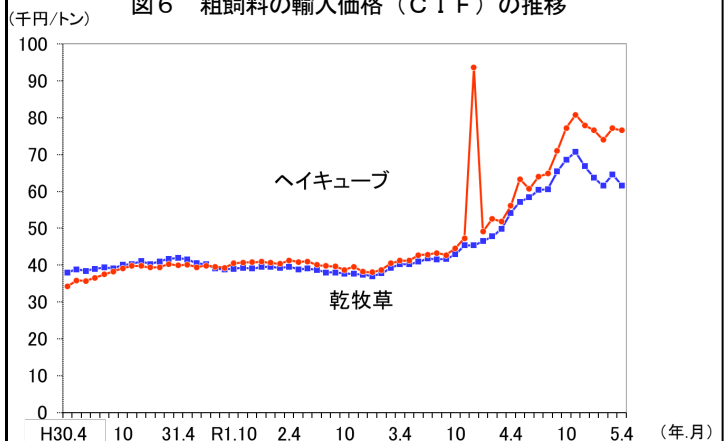
図5 粗飼料の輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」

注：稲わらは、中国から輸入された穀物のわらである。

図6 粗飼料の輸入価格（CIF）の推移



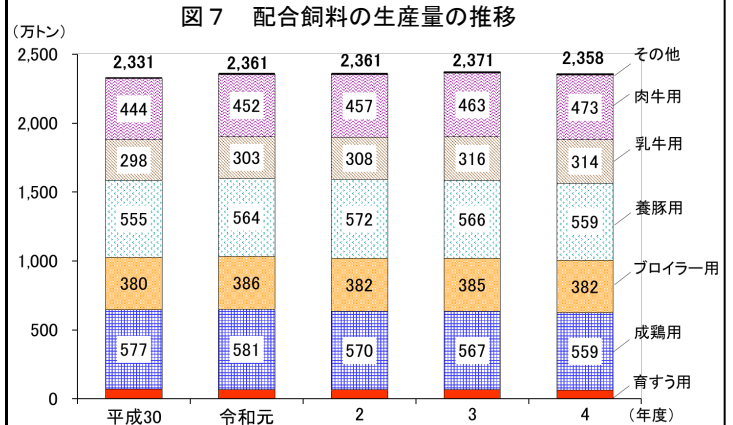
資料：財務省「貿易統計」

## ◆ 配合飼料の生産

### 4年度の生産量は微減

配合飼料の生産量は、昭和63年度をピークに家畜飼養頭羽数の減少に伴って緩やかに減少していたが、近年は横ばいで推移しており、令和4年度は2357万9013トン（前年度比0.5%減）となった（図7）。

畜種別で見ると、養鶏用が1005万5780トン（同1.4%減）、うち成鶏用が559万2597トン（同1.3%減）、ブロイラー用が381万6432トン（同0.8%減）となり、養豚用は559万744トン（同1.2%減）、乳牛用は314万2042トン（同0.6%減）、肉牛用は473万833トン（同2.2%増）となった。



資料：農林水産省「流通飼料価格等実態調査」〈速報版〉  
（公社）配合飼料供給安定機構「飼料月報」

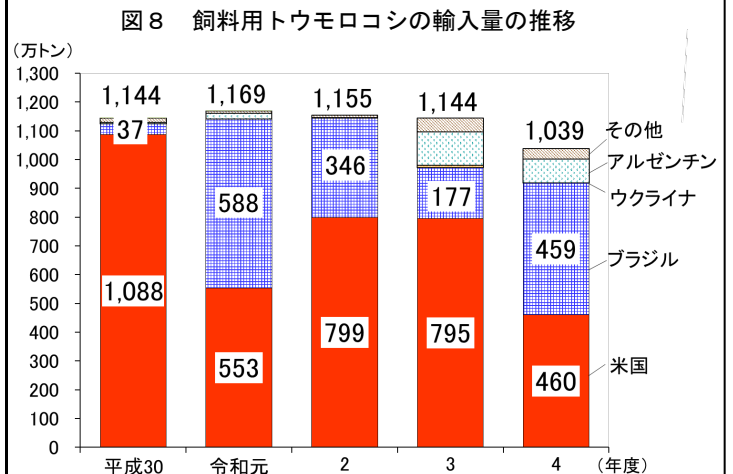
## ◆ 飼料用トウモロコシの輸入

### 4年度の輸入量は、ブラジル産が大幅に増加

配合飼料の原料穀物（トウモロコシ、こうりゃん、大麦、小麦など）のほとんどを輸入に依存しており、輸入量の8割以上をトウモロコシが占める。

トウモロコシの輸入量は、3年連続で減少し、令和4年度は1038万5357トン（前年度比9.2%減）となった（図8）。

4年度の輸入量を輸入先別に見ると、前年度に天候不順によりシェアが低下したブラジル産が記録的な豊作によりシェアが拡大し、458万9427トン（同2.6倍）と大幅に増加した。一方、米国産は夏季の高温乾燥による単収の低下などから460万1281トン（同42.1%減）と大幅に減少した。



資料：財務省「貿易統計」

## ◆ 配合飼料価格

### 4年度の配合飼料工場渡し価格は、前年度から21.2%上昇

配合飼料価格は、飼料穀物の国際相場、海上運賃、為替相場などの動向を反映する。令和4年度の工場渡し価格は、1トン当たり8万8680円（前年度比21.2%高）となった（図9）。

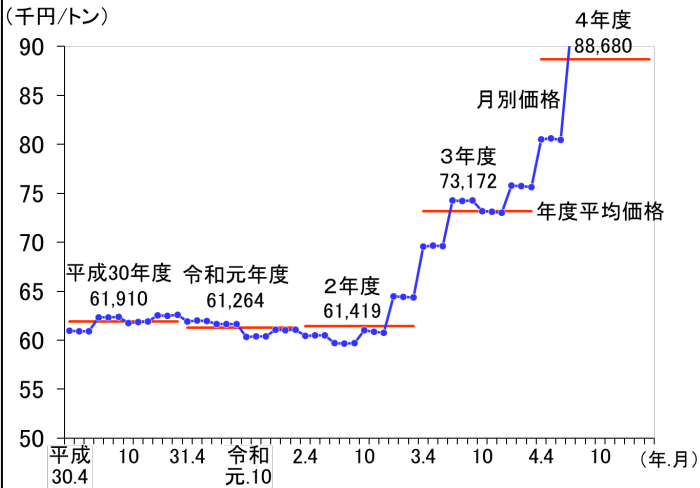
畜産経営では、生産費に占める配合飼料費の割合が高い。このため、配合飼料価格の上昇が畜産経営に及

ぼす影響を緩和する措置として、民間の自主的な積み立てによる通常補填<sup>ほてん</sup>制度と、通常補填で対応し得ない価格高騰に対応するため、国と民間が財源を拠出する異常補填制度が導入されている。

令和2年度は、中国の需要増加などを背景にシカゴ相場が上昇したことから、第4四半期に8期ぶりに通

常補填が発動した（表）。3年度第1四半期は通常補填が発動するとともに、16期ぶりに異常補填が発動し、続く3年度第2四半期～4年度第4四半期も通常・異常補填ともに発動した。

図9 配合飼料の価格動向の推移



資料：農林水産省「流通飼料価格等実態調査」＜速報版＞および（公社）配合飼料供給安定機構「飼料月報」  
注：全畜種加重平均の配合飼料工場渡し価格。

表 配合飼料の価格（建値）改定および補填状況

(単位：円/トン)

適用期間	価格改定額 (対前期差)	補填単価			
		通常	異常		
30年度	第1四半期	+ 1,100	300	300	-
	2四半期	+ 1,550	3,450	3,450	-
	3四半期	▲ 800	2,300	2,300	-
	4四半期	+ 500	300	300	-
令和元年度	第1四半期	▲ 850	-	-	-
	2四半期	▲ 400	-	-	-
	3四半期	▲ 650	-	-	-
	4四半期	+ 700	-	-	-
2年度	第1四半期	▲ 800	-	-	-
	2四半期	▲ 1,000	-	-	-
	3四半期	+ 1,350	-	-	-
	4四半期	+ 3,900	3,300	3,300	-
3年度	第1四半期	+ 6,600	9,900	3,999	5,901
	2四半期	+ 2,300	12,200	4,934	7,266
	3四半期	▲ 3,700	8,500	4,372	4,128
	4四半期	▲ 3,300	5,200	3,451	1,749
4年度	第1四半期	+ 4,350	9,800	5,039	4,761
	2四半期	+ 11,400	16,800	5,454	11,346
	3四半期	+ 0	7,750	7,254	496
	4四半期	▲ 1,000	950	623	327

資料：全国農業協同組合連合会（JA全農）、農林水産省  
注：価格改定額はJA全農の全国全畜種総平均。